様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：１２６１３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５２０２０９

研究課題名（和文）近世初期出版界の様相と文学

研究課題名（英文）Early modern publishing circles and Literature

研究代表者
柏崎　順子（KASHIWAZAKI, Junko）

一橋大学・大学院法学研究科・教授

研究者番号：２０２６２３８９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の開始までに蓄積してきた近世初期出版史の研究成果を土台にして、出版が開始された当初の版権意識の在り方、当時の草紙を出版する書肆の中で特有の位置にある鱗形屋の動向調査、古浄瑠璃出版の様相,挿絵を通してみた初期出版界の様相について、それぞれ論文にまとめた。こうした本研究における成果も踏まえて最終年度である2015年には、近世初期出版界の京都と江戸と伊勢の関係や、ジャンルごとに異なる出版の様相等からみえてくる当時の文学の醸成されていく様を論文としてまとめた。この論文は文学史の問題、版権意識の問題、ジャンル意識の問題等について通説の再考をせまるものであり、高い評価を得ている。

研究成果の概要（英文）：Based on the research achievements of the past and to clarify the following points of early modern publishing circles.It was discussed about the situation of the era of relationship between the publishing and literature are created. As a foundation such achievements, it was discussed about the relationship of Kyoto, Edo and Ise in the early modern publishing circles and the literature at the time that we see from the aspect of different publication in each genre will be building.
The title of the paper are publishing circles in the early Edo period・The publishingtrade in the early Edo period and old JORURI・Turuya Kiemon・Illustration in the Early Edo Period.

研究分野：近世日本文学

キーワード：書誌学　出版史　江戸版

１．研究開始当初の背景

本研究の背景には、江戸初期文学研究を、従来のような作品や作者の研究からではなく、出版史の観点からアプローチしてみようという、新たな手法で行ってきた研究の蓄積がある。また出版史の解明という点についても、これまでジャンルごとの枠内で行われてきた出版史の研究を、一旦その枠を取り払って出版物の全体的な調査を行い、そこに見えてくる事実をジャンルごとの個別の問題に還元しようとする点においても、新たな発想の研究手法といえる。具体的には過去３０年間の、以下のような江戸初期出版史研究の実績がある。

（１）江戸初期における本格的な江戸資本の書肆松会市郎兵衛とその子孫が出版した版本の悉皆調査の成果を『増補松会版書目』(青裳堂書店、2009 年)にまとめた。本書は後半に松会版の刊記部分の写真も掲載しており、江戸版の造本様式の特徴を考察するうえで有効な手がかりを提供する資料として評価されている。また「備考」という項目に、有年記本と無年記本の版の関係等の情報も付し、単なる資料提供にとどまらず、松会版の出版の動向を総合的に考察することに資する書目となっている。この基礎資料の完成によって、江戸初期の出版界における江戸と京都の関係、江戸における出版の様相等を解明する基盤が整ったのである。本書は、これまで存在しなかった江戸初期の版本の書肆別の書目として、特に仮名草子の研究に現在も貢献している。

（２）『増補松会版書目』のデータを基盤として、松会版と同じテキストを持つ京都版および江戸版の悉皆調査を行い、江戸版が作成される際の元版である京都版を出す書肆と江戸版出版の書肆は何らかの繋がりを有している傾向があることを論文「江戸版考　其三」(『人文・自然研究』第４号、2010 年)で明らかにした。これは、江戸版は京都版を勝手に流用して作成されていたという通説を覆す論であり、この時期のジャンルの形成のされ方や、仮名草子というジャンルの研究を根本から見直すべき画期的成果と評価された。

（３）江戸初期、江戸出版界における本格的大手の書肆である松会市郎兵衛の子孫とコンタクトをとることに成功し、資料の提供を受けた。その結果、松会は伊勢出身であることが判明した。この事実をもとに、これまでの江戸初期出版界の動向調査の際に看取された出版界と伊勢の関わりについて調査・考察を重ねた結果、初期出版界は江戸の書肆松会をはじめ、伊勢出身の書肆が営業を開始した例が多く、それらの書肆は流通やテキストの供給等において、何らかのつながりがある可能性が高いことを明らかにし、論文「江戸初期出版界と伊勢」(『人文・自然研究』第６号、2012 年)にまとめた。

２.研究の目的

以上のような研究成果を基盤としてはじめて可能な以下のような問題を解明することが、本研究の目的である。

（１）これまでに明らかにした江戸初期出版界の様相をもとに、それらの現象が当時のテキストといった有形的存在ではないもの、いわば無体物の所有ということに対する認識の問題と関係があるのではないかという見通しのもとに、どのような所有意識が存在していたのか、その点の再検討をする。この考察で見えてくるものが、当時の文芸がどのように展開していたかを考える上で重要な意味をもつのであり、出版を媒体として展開した文学の考察には必要不可欠である。

（２）研究を進める上で重要な鍵となる書肆である江戸の書肆松会の出自が伊勢商人であることが判明したことで、伊勢商人と江戸初期出版界との関係を考察する必要が生じている。というのも伊勢は、近世以前から伊勢暦を印刷するために印刷技術を有しており、近世初期の出版の発展に関与していた可能性も充分に考えられるのである。この考察は従来、近世初期出版界は、京都・江戸、大坂という三都で展開していたという通説を再検討するものである。こうした考察の結果が江戸初期の文学の形成にどのような要因が存在するのかを再考する有益な手がかりとなるはずである。

（３）いわゆる江戸版の次期の出版として登場する菱川師宣絵本の悉皆調査によって挿絵の画風について、テキスト同様、京都と江戸の出版界にどのような関係性が存するのかを考察し、挿絵からみた江戸初期出版界の様相を明らかにする。またこの考察の精度を高くする意味において、師宣以前の師宣風の挿絵についての考察もあわせて行う。実は師宣風の挿絵については、江戸のみでなく京都版においても使用されていることが知られているが、それは何故か、例えば京都と江戸の出版界の交流の結果なのか等の問題を考察することで、その次期となる絵本が江戸でのみ登場してくる現象の考察にもたらすからである。

（４）上記の二つの考察の成果を踏まえ、これまでに明らかにした京都と江戸の書肆の関係、出版物におけるテキストの関係、ジャンルごとの出版の様相、及び伊勢との関係等、多角的な考察を通してみえてくる近世出版界の様相を、文学が醸成される社会的要因としてとらえ、論文にまとめ、研究全体の総括とする。

３．研究の方法

（１）江戸初期出版界における版権意識につ

いて考察する材料として、まず出版が開始された当初のテキストの入手事情について整理する。出版開始当初は、新たな著作物はほとんど入手することができず、出版するテキストは専らすでに存在していた仏教関係の書や漢籍、そして古典文学等であった。このうち古典文学は写本で幾本かあちこちに残っているという状況のなか、本屋は同一のテキストをそれぞれ異なる所蔵元から入手し、出版していたのであり、そうした写本として世に伝わった諸本は、部分的に異なる内容を持つことが少なくない。書写によって伝播した故に生じる異文である。よって同一名のテキストでも内容は微妙に異なることもあり、その結果、固有のテキストを使用しているという感覚は生まれにくかったのではないかと考えられる。こうした事例をはじめとした初期出版界のテキストに対する意識を形成するような様々な事象について整理する。以上の考察を踏まえて元禄 11 年に京都と大坂で出された重版類版禁止令の周辺事情や、寛延 3 年、江戸における本屋仲間の訴訟等について検討し、テキストに対する所有意識が醸成されていく様子やその変遷を整理することによって、現代とは異なる所有意識について考察する。

（2）江戸初期出版界と伊勢との関係を考察するために具体的には、伊勢の文芸として俳諧と古浄瑠璃について調査をする。俳諧については伊勢俳諧の活動について考察し、伊勢の俳諧関連の出版物の調査を行う。伊勢俳諧の俳書は伊勢での出版の他に京都でも出版されている例が少なくない。そこで、伊勢俳諧の俳書を出版する京都の書肆に何らかの傾向がみられないか、その点について重点的に調査を行う。また古浄瑠璃については、伊勢での浄瑠璃興行の実態や、伊勢に関係ある太夫(浄瑠璃の語り手)の動向やそれら太夫が語る正本の出版の実態について調査しまとめる。そのため古浄瑠璃の正本や俳書の調査を行い、地域別、書肆別等で何らかの書誌学的特徴が看取されるかどうかを検証し、伊勢と出版界の関係を考察する資とする。

（3）延宝期以降に江戸で出版された絵師菱川師宣による絵本について、出版する書肆や書誌学的特徴について把握するために悉皆調査を目標に調査する。このいわゆる師宣絵本は、海外の機関に所蔵されているものも多く、国内外の調査を行う必要がある。こうした調査は、刊記や奥付の変化や序文・跋文の有無等の違いが生じている可能性があるため、存在する版本諸本の調査が必要である。

４．研究成果

上記のような研究目的で調査や考察を開始したのであるが、所蔵先が移転のため長期の休館となる、あるいは所蔵先の都合で閲覧ができないなど、当初の計画通りに進まない事態が発生した。それは本研究が方法として未踏の、資料作りからはじめなければならない研究であることに由来する常に付きまとう困難であった。その点は調査の途上新たな課題が発生したこともあり、そちらの調査に切り替えて考察し論文を執筆するという処置をとった。全体としては以下のような成果を得た。

(1) ある特定の時期にのみ出版された独特の造本様式をもつ、いわゆる江戸版の存在する理由については、従来は江戸好みに作り直して売り出すことが目的ではないかとされていたが、江戸様式に作りなおすにはコストがかかり、必ずしも説得力のある説とはいえなかった。しかし本研究の調査で明らかになったように、京都版のテキストが江戸で利用される際、例外無くいくつかの新たな様式に変えられていることを考えれば、斯様に見た目を変えることが、テキストの利用を許認する際の要件になっていたと考えるのが妥当であることを踏まえ、当時のテキストの所有意識は、その本が「もの」として異なるものになっていれば、違うものとして認識するような、今日とは異なる感覚があったのではないかということを、当時の版株(版木所有の権利。出版権)の在り方や、写本として同一テキストが複数存在していたなかから、そのテキストが複数の書肆によって出版にふされていく状況等を解明しながら考察し、論文「版権意識醸成以前の初期出版界―仮名草子再考」(雑誌論文④)にまとめた。

(2) 近世初期における江戸版の考察は、ジャンルとしては主に仮名草子に関わるものとなっていた。そこで、同時期に出現した、他の娯楽に供するジャンルの例として古浄瑠璃の出版との関係について、京都と江戸の古浄瑠璃を専門として出版する書肆の営業地の傾向や作者の問題、テキストの流用のなされ方、古浄瑠璃と仮名草子の出版における関係性等について考察し、論文「初期出版界と古浄瑠璃」（雑誌論文③）にまとめた。その結果、当時の文芸と出版の関係から京都と江戸の文芸がどのような影響関係にあるかが見えてきた。仮名草子については江戸版の考察において明らかであるように、京都から江戸への影響が大きいが、古浄瑠璃に関しては江戸から京都への影響が大きいことが判明したのである。このことは本研究が、常道とは異なる、ジャンルを横断して出版史を考察するという独自の観点を有していることによってはじめて得られた成果といえよう。

(3) (2)における研究成果を得て、京都と江戸の出版の関係性は双方向の影響があるということが判明したわけであるが、そこで思い起こされるのが書肆・鶴屋喜右衛

門である。鶴屋は京都で最も早く古浄瑠璃を専門として出版を開始した書肆でありながら、造本様式としては江戸版様式の仮名草子の出版を何点か確認することができるという点で検討を要する書肆なのである。これらの江戸版様の鶴屋版には住所が記載されていないため、にわかには京都版か江戸版かは判別できない。この江戸版様の鶴屋版が、京都における出版なのか、あるいは江戸における出版なのかは、江戸版様の造本が江戸の出版に限定したものか否かを明らかにするために重要な考察である。そこで、現時点で存在している江戸版様所付け無しの鶴屋版すべてについて書誌学的考察を行ったが、結論としては京都の版本か江戸の版本かは断定することはできなかった。しかしこの作業はこの時期の書肆の動向を把握するためには検証しておくべき課題であった点において成果を残した考察と位置付けることができる。論文「鶴屋喜右衛門」(雑誌論文②)としてまとめた。

(4) 鶴屋のアプローチと同様に京都と江戸の関係を知るうえで重要なアプローチとして挿絵の問題がある。江戸版の特徴である、いわゆる師宣風の挿絵は、実は京都版にも使用されていることが少なくない。そもそも学界において、この師宣風の定義が必ずしも安定しているわけではない。このことは様々な方面の研究の進展を阻んでいるといっても過言ではない。そこで、あらためて師宣風という画風について延宝期以前の京都と江戸の挿絵について整理してみた。また、草紙屋についても扇屋等の異業種から写本の草紙類を作成するようになった書肆と、出版を前提として登場してきた鶴屋のような草紙屋とは根本的に異なる属性をもつ書肆であるということを指摘し、今後の近世初期文学研究において、依拠するべき指摘を行った。このことは、鶴屋等の草紙屋がその後の草紙類の展開においても、中心的な存在にあった点において、近世初期出版界と文学の関係を検討する上でも、娯楽に供するような文芸が醸成されていく仕組みのようなものを考察する上で、重要な点なのである。こうした考察を論文「江戸初期版本の挿絵―延宝期以前―」(雑誌論文①)にまとめた。なお研究当初の目的としては師宣絵本について書誌学的な調査を行い、その書肆や造本の特徴、序文・跋文の内容等から、江戸版が作成されなくなり、師宣絵本が作成されるようになる出版界の様相を考察する計画であったが、予想以上に師宣絵本の所在が明らかとなり、悉皆調査を達成することができなかった。しかしホノルル美術館やスウェーデン王立図書館ノルデンショルドコレクション等をはじめ、国内外において行った師宣絵本の調査は、今回まとめた上記論文を作成する上で、師宣の画風をもつ挿絵の、師宣以前、すなわち延宝期以前の挿絵の考察の際にも、重要な参考資料となった。
論文「江戸初期版本の挿絵」は今後、師宣絵本の考察をまとめる際にも大きな布石となる研究のまとめになったといえる。

(5) 以上のような本研究における成果を踏まえ、近世初期出版界と文学がどのような経緯で結びつき、発展したか、出版界の動向が、どのように京都や江戸の文芸の発展に影響を及ぼしたかについて、現時点で解明し得た分について統括的な論文として「江戸版からみる一七世紀日本」という論文を共著のなかでまとめた。(図書①) この著はシリーズ〈本の文化史〉の２として『書籍の宇宙―広がりと体系』という書名で編まれたものであり、近世文学研究という点だけではなく、一七世紀日本を社会学的に考察する材料の一つとして書籍文化というものを位置づけたものであり、本論文の収録は、書籍を材料としてさまざまな方面の課題を追及し、その成果をあげたことが評価された証である。

本研究は、従来の文学研究とは発想を異にする、あらたな方法による研究であったため、一本一本の近世初期出版物の書誌学的調査を行うことによる資料作りから始まったものであり、研究の途上では調査先の様々な事情で思うように本の調査がはかどらなかったということや、江戸初期に本格的な江戸資本の書肆として登場してきた松会の子孫とコンタクトがとれたことにより、研究が当初の計画とは異なる調査課題も持つようになったことも影響して、当初予定していた研究目的までは到達することができなかった。具体的には師宣絵本の悉皆調査による江戸版の次期の出版界の様相についての考察に及ばなかったことである。しかしこれは新たな検討課題を得たことにより、当初の計画とは別の意味で、本研究に充実した成果をもたらしたということであり、書肆松会が伊勢の出身であることから調査が途上にある、伊勢との関係という点においては、その後の江戸文学界における、例えば菊屋七郎兵衛などの伊勢との関係等、本研究の今後の進展が延宝期以降の文芸においても重要な成果をもたらす可能性を浮き彫りにしたということなのであり、浮世草子等の次期に登場してくるジャンルと出版との関係についても今後研究課題としていく方向が定まったことも本研究の成果といえよう。

５．主な発表論文

〔雑誌論文〕(計４件)

① 柏崎順子、江戸初期版本の挿絵、言語文

化、52 巻、2016、79－94

② 柏崎順子、鶴屋喜右衛門、言語文化、査読無、51 巻、2014、21－33

③ 柏崎順子、初期出版界と古浄瑠璃、言語文化、査読無、50 巻、2013、65－81

④ 柏崎順子、版権意識醸成以前の初期出版界―仮名草子再考―、言語文化、査読無、49 巻、2012、95－108

〔学会発表〕（計１件）
① 柏崎順子、江戸初期出版界の様相、第 87 回「書物・出版と社会変容」研究会、2014 年２月１日、一橋大学（東京都国立市）

〔図書〕（計１件）
① 鈴木俊幸編『書籍の宇宙―広がりと体系』、平凡社、2015、344（165-195）、査読無

〔その他〕
一橋大学機関リポジトリ　HERMES-IR
Research ＆ Education Resource
https://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/

６．研究組織
（１）研究代表者
柏崎　順子（KASHIWAZAKI, Junko）
一橋大学・大学院法学研究科・教授
研究番号：２０２６２３８９